

市場経済システムの歴史③

法政大学 経済学部教授 (客員) 渡部 亮

今回は、個人の土地所有権を基盤とする個人主義的なカルチャーが、英国では相当に早い段階に形成され、それが資本主義発展の原動力ともなつたと述べた。

封建制(資本主義の前の段階)のもとでは、土地は集団的に共同利用されており、所有権の概念はあいまいであった。そもそも理論的には国王が土地の所有者であったし、それに加えて神や教会が土地所有に介在し、さらに土地を利用して実際に耕作にあたるのは、農奴や小作人であった。したがって、土地の所有権はいわば混沌とした状況であったといえる。

それが英国の場合、13世紀から18世紀前半に至る長い移行期の中で、まず土地持ちの貴族(landed aristocracy)が個人の所有権を主張するようになった。その過程では、囲い込み運動による土地の私有化、内戦による集団的所有の形骸化、賃金労働者の出現なども起きた。

集団的な土地所有から個人の土地所有へ

フランスの啓蒙思想家モンテスキューは『法の精神』(1748年)のなかで、英国では貴族の商取引が是認され、そのことが英国の絶対君主の権力を弱めたとしている。またモンテスキューは、英国以外の国では商業利益が政治利益に従属したが、英国では逆に政治利益が商業利益に従属したこと、英国民は宗教、商業、自由の三者を同等に重視し、それぞれの利点をバランスよく活用するにはどうしたらよいかを熟知していたこと、こういった諸点を指摘している。

その英国では貴族に続いて、あるいは貴族と並行して、自作農が個人としての所有権を獲得するようになった。前回も引用したマクファーレンは、裁判所や教会の記録、牧師や小作農の日記や遺言書などをもとに、13世紀から18世紀前半にかけ

ての長い移行期における英国社会の変化を丹念に跡付けている。それによると、この長い移行期の相当に早い段階で、自作農の土地所有が始まっていたという。

この移行期は、1500年前後を境にして、より封建制に近い前半と、より市場経済システムに近い後半に分けることができる。前半における自作農制度の大きな特色は、家計の全構成員(家族)が共同して土地所有、労働力供給、農業生産、生産物消費などを行い、経済活動と社会生活が家計単位で完結していたことであった。15世紀末までの時代(移行期の前半)において、家計が保有した土地は、一家を養うには十分な大きさであったが、市場で農作物を売るような農業経営をするには小さすぎた。

個人としての自作農の登場

こうした自作農が、16世紀には英国人口の半分を占めるようになったが、それ以降(移行期の後半)になると、自作農の実態は少しずつ様相を変え始めた。すなわち、自作農が家計としてではなく、個人として土地の所有権を確立し、家計の構成員自体も個々に独立するようになった。その後、18世紀後半の産業革命期に向けて、市場経済化が徐々に進行すると、自作農の比率自体はむしろ頭打ちになり、家計と経済との分離を特色とする工場制の資本主義に移行した。

なお先行研究の中には、もっと早い時期(たとえばペストが流行した14世紀中ごろ)に、家計単位の土地所有が崩れ始め、家父長が個人の資格で第三者と土地取引を始めたとする研究も存在する。しかもその所有権が、身分や地位によって生得的に与えられたのではなく、個人間の契約によって決められた。そうした事実が13~14世紀には散見されたという。つまり本来の自作農制度の特徴は、

家計と経済が一体不可分という点にあったのだが、英国の場合には、そうした本来の意味での自作農制度が、早い時期に崩壊し始めたということになる。

市場経済の出現

ともあれマクファーレンは、魔女伝説や牧師(かつ自作農)の日記などを手掛かりとして、16世紀から18世紀前半の時代には、イングランドの全域において個人主義的かつ合理的に行動する自作農が出現し、土地、家などの不動産から農具のような動産にいたるまで、ほとんどの物に値段が付けられて、持ち主がそれらを市場取引の対象としていたと論じている。そのころになると、社会の基礎的構成単位は、家計から個人や個人事業となり、個人の所有権や交換取引における貨幣の使用も確立した。

資本主義的生産の起源を、禁欲的な個人の所有権と資本蓄積を是認するプロテスタンティズムに求めるマックス・ウェーバーの所論も、こうした時期の英国経済を念頭に置いている。ウェーバーの歴史モデルは、ふたつの柱によって構成されている。第一は、宗教と経済の分離によって世俗社会を認知したこと、第二は、家計と個人の分離によって個人の存在を認知したことである。個人の自由や所有権を尊重する西欧のカルチャーが、権力集中を排除するプロテスタントの教義にマッチしたともいえる。

個人主義の伝統

大陸欧州諸国では戦争や疫病によって、大きな人口変動が18世紀まで続いたが、英国では14世紀後半以降、人口の激減を経験することはなくなった。それ以降の英国は、特に16~17世紀になると、主として羊毛の輸出によって相当豊かな開放型社会に移行した。

16世紀に英国を訪れたドイツ、オランダ、イタリアからの旅行者たちは、家畜の多さ、食肉や砂糖の消費量の多さ、家具や調度品の豪華さなどの点で、当時の英国の豊かさに感銘を受けたようである。またマクファーレンによれば、大陸欧州諸国の魔女が集団行動をするのと違って、英国の魔

女は個々に単独行動し、しかも経済的成功者(成り上がり者)を懲らしめるといった類いの魔女伝説が存在しなかったという。閉鎖的な共同体といった概念も、そのころには消滅していったらしい。

早い時期に核家族化

現代にも受け継がれる英国の開放型社会は、人々の地理的移動を活発にした。自由契約の賃金労働(召使を含む)が増加し、勤勉と貯蓄をモットーに財産を蓄積し、子供が親から独立して核家族化する、そうした社会がいち早く形成された。親が結婚相手を決めるのではなく自由恋愛が認められ、しかも財産を形成した後の晩婚が多く、逆に近親相姦は少なかった。英国の封建制は、大陸欧州諸国におけるほど強固ではなく、個人主義のカルチャーが早い段階に形成されたといえることができる。

なお核家族化に関してマクファーレンは、15世紀末に英国を訪れたイタリア人など外国人の手記を紹介している。それによると、英国の普通の家庭では、10歳未満の子供をほかの家に奉公(徒弟)に出し、その代わりにほかの家の子供を奉公人として預かった。自分の子供が家に居ると、両親と同じ食事を与えなければならないが、他人の子供が奉公人であれば、そうした心配もしなくて済む。そして一度奉公に出た子供は、成人しても両親の家には戻らず、そのまま独立して、独自の家計を形成したという。

現在の英国でも、子供は18歳になると親元を離れて自活する。親と子供の関係も、相互依存関係から対等な関係になり、経済的かつ精神的な自立が促進される。南欧諸国のように、数世代の家族全員が、同じ家の一階、二階、三階に同居するといったようなこともない。(以下は次号に続く)

わたべりょう (法政大学教授)